

で比較しているが、従来通りか、さほど変化はなかったと報告している（香川大学）。

また、学部ごとの受験者については、工学部

及び理学部に増加が目立ち、文学部、医学部及び法学部がやや増加し、薬学部及び教育学部の減少が目立ったとの報告もあった（熊本大学）。

大学における学習及び生活

本年度も共通第1次学力試験、2次試験の各得点や総得点と学内成績、高校調査書と学内成績、共通第1次学力試験と2次試験などのそれぞれについての相関関係の調査検討が大学での進歩を示す学生に入学してもらいたいという願望のみならず、大学の実施する入学試験科目が入学者の選抜に当たって信頼性が高く妥当なものであるか否かを考察するためにも多くの大学で行われている。

共通第1次学力試験と2次試験との間については何の関連性もないことを報告している大学がある一方で、特定の試験科目相互間に安定した有意な相関係数が得られているものもある。入試の成績と大学の成績の間には一般的にいったあまり関連は見られないが、高校調査書の評点の平均については、入試成績との間に見られたものよりも高い相関があり有意な結果が得られており、現役・浪人の区別なく高校調査書の評定値の高い者に入学後の成績に問題のある者が少ないことも報告されており、評定値の高さと医師国家試験合格率と関係があるという報告もある（高知医科大学）。また推薦入学の高校格差を検証するために高校調査書と大学成績との関連についての研究を行っているところ

もある。しかし、この関係についても否定的なものが報告されており、さらにこの問題がもつ学力の識別力について多くの研究を重ねて、入学選抜資料としての有意義性を検討することが必要であろう。小論文は記憶の再認を中心とした客観テストによる入学者選抜に対する批判の一つとして用いられることが多くなったが、その評価と入試総得点、共通第1次学力試験成績、各科目の入試成績の間に有意な相関があり、選抜方法としての意義を高く評価するものがある。しかし、入学後の成績との関連についても教養課程での成績、専門課程での成績との間で考察されているが、必ずしも肯定的関係のみが示されてはいない。面接試験については、入試成績や高校成績との間に有意な相関があり、選抜方法としての識別力を評価するとともに、評定に当たっての主観性を取り除くために面接成績の順位相関による検討を行ったり、面接グループごとの評定のばらつきを分散分析を行うことで面接法による試験の信頼性を高めるための努力がなされている（滋賀医科大学）。

推薦入学、2次募集による入学の場合の学内成績の比較も行われている。推薦入学制の導入は入学選抜の基準を多様化して特色のある学生

を獲得しようという目的をもつとされるが、学内の成績については一般的に推薦入学者の方が一般学力入学試験による入学者よりも良いことが多く、留年率も一般入学者よりも低く、この点においては一応の効果があることを示唆する報告がなされている。定員留保による2次募集については、保留枠の大きさによって入学後の成績に影響があり、枠が大であれば成績の低下が見られるほか、成績の2極化傾向が強いことも明らかにされている。

大学の志望動機についてのアンケート調査も行われており、入試成績の高水準のものに第1志望の者が多く、自分の学力を志望理由にあげた者に入試成績の良い者が見られ、他者の意見

による志望者は順位が低く入学後の大学生活の満足度も十分でないことが明らかにされ(大分大学)、大学への適応性を考えるうえで一つの示唆が与えられている。また入試科目の選択が入学後の履修科目の修得に影響を与えることの懸念や教員採用数の激減が高校調査書の上位群の減少につながり、ひいては学生の学力低下をもたらす心配をもらす報告もあり、さらに出題内容についての高校教師の評価・意見を積極的に求めようとするアンケート調査も試みられており、いずれにしてもより優れた学生を選抜することが大学の最大の関心事であるので、方法の改善に向かって着実に歩みが進められているように思われる。

進路選択

受験者の進路選択は本来、受験者自身が主体的に行うべきものであろう。「入りたい大学より入れる大学」を選ぶのはけしからんなどという批判はこの建前を前提にしたものであろう。しかし、考えてみると現在の社会環境は、大学を受験しようとする若者にとって、この建前が簡単に実現できるほど単純ではない。本当か嘘か分からないものも含めて、有り余る情報の洪水の中から真に有用な情報を選択するのは容易ではない。そして自己の能力や個性や関心を深く考察して自らの進路を選択するためには、現在の若者の周囲はあまりにも騒々しい。かくして多くの受験生は他力本願的に進路を選択し、「入

れる大学」に入学する。このような現状を容認して良いはずはないが、その責任が受験生だけにあるとするのは酷である。

このように考えると、大学受験と進路選択には2つの問題が浮かび上がってくる。ひとつは、自分の進路を自分で選択できるような若者を育てる努力をすることであり、いまひとつは若者が自分の進路を選択する際に、周囲の人が適切な指導・助言をすることである。何が「適切な指導・助言」かという問題は単純ではないが、この問題は昨年6月東京芸術大学で開催された入研協第8回大会において、「大学入試と進路指導」というテーマで開かれた公開パネルで真剣